

## 論文要旨

学位論文題目：発達障がい児を育む「創造的身体表現遊び」の実証的研究

氏名：大橋 さつき

本論文では、ムーブメント教育と身体表現活動を基盤に展開してきた筆者独自の実践を「創造的身体表現遊び」（以下 CMD と略す）と名づけ、発達障害児を対象とした実践をもとに理論構築を試みることを目的とした。

第 1 章の序論では、まず、研究の動機と経過、背景についてまとめ、本論文の目的と構成を示し、用語の整理を行った。

第 2 章では、筆者が実践してきた 60 のプログラムの記録を対象に、参加した発達障がい児の様相を含めて内容を明らかにした。続いて、親が残した記述から発達障がい児支援における「創造的身体表現遊び」の効果に関する仮説として次の 3 点を掲げた。

<仮説 1> 「創造的身体表現遊び」は、発達障がい児が主体的に「動きたくなる」環境を提供し、発達障がい児の身体運動能力の発達を促進する。

<仮説 2> 「創造的身体表現遊び」は、集団で活動する場面や他者とのやりとりを促す活動が多く、発達障がい児のコミュニケーション能力の向上に機能している。

<仮説 3> 「創造的身体表現遊び」は、喜びや満足感、達成感、意欲の向上を支える要素が強く、発達障がい児の自尊感情の低下を防ぐ効果がある。

第 3 章では、<仮説 1>を受け、3 年間継続的に実践に参加した ASD 児 3 名を対象に、MEPA-R と空間関係把握検査によるアセスメントを実施し開始時と終了時の結果を比較した。MEPA-R においては、様々な項目で伸長が見られ、空間関係把握検査においては粗点の向上が見られ、「創造的身体表現遊び」のプログラムが発達障がい児の身体意識能力の向上を促し、空間関係把握能力にも影響を与える可能性を見いだした。

また、第 2 章でまとめた実施プログラムの内容や対象児の変化の様相、先行研究による知見を合わせて総合的に考察し、次のような見解を得た。すなわち、「創造的身体表現遊び」において遊具や他者とのかかわりから自然に生み出される能動的な運動体験が、発達障がい児の身体意識の形成を促し、空間把握能力を向上させ、より高度な身体運動能力の発達につながる、そして、その高い身体運動能力によって、さらに自主的で能動的な運動体験を得ることができ、それらがさらなる身体意識の形成や空間把握能力、運動能力の向上につながるという好循環の流れである。

第 4 章では、<仮説 2>を受け、継続的に実践に参加した ASD 児 4 名の実践記録をもとに、他者との相互作用に関する分析を行った。その結果、対象児の他者との相互作用が成立する確率が高まったこと、かかわる相手によってコミュニケーションの相互作用の成立に差があること、活動の継続によって相手側の反応率が上昇したことが明らかになった。さらに、相互作用が成立した場面の特徴のカテゴリー分類を行い、(a) 情動

的交流・身体的共振、(b) 遊具の共有、(c) 遊びの流れの共有、(d) 模倣、(e) 自己決定・自己主張の5つを見いだした。これらから、「創造的身体表現遊び」におけるコミュニケーション支援の方法の特徴として、コミュニケーションの「伝達」を中心とする側面だけでなく、「共有」の機能を重視して、身体で通じ合う体験を通して、何より「かかわりたい」という欲求を育むことをコミュニケーション支援の軸とする点をまとめた。また、包括的な遊びの場に生じる実体験を通して様々なコミュニケーションの「型」をなぞることにより、スキルを高めていくという方法を持つことにも着目した。さらに、「創造的身体表現遊び」においては、コミュニケーション能力の発達を、個人の能力の変化という見方ではなく、子どもが生きている社会や共同体における営みや活動に現れる「関係」の有り様の総体の変容としてとらえていると論じた。

第5章では、〈仮説3〉を受け、自尊感情を育む「創造的身体表現遊び」の機能を明らかにするために、まず、先行研究の分析より、自尊感情の定義と発達障がい児に適用できる尺度を提示した。次いで、実践記録を対象に第4章で対象となったASD児4名の自尊感情傾向の変化を調査した結果、対象児の自尊感情傾向が上昇したことが明らかになった。また、自尊感情傾向と関連する場面の分析から、「創造的身体表現遊び」が有する次のような構造が対象児の自尊感情を支えたと考察した。すなわち、「創造的身体表現遊び」は、①基本的自尊感情に大きく関与する「共有体験」を多く内在している、②一人ひとりの発達段階に適したスモールステップの課題設定による達成体験や肯定的ストローク、競争的場面の排除、集団活動による他者の存在から生じる代理体験等が自己効力感を高めている、③自己決定や自己表現の場面が豊富に設定されている、④場が居場所となり所属感を高めていることを示し、継続的に「創造的身体表現遊び」に参加することにより発達障がい児の自尊感情傾向が向上する可能性が示唆された。

第6章では総括として、まず第1節では、第1章から第5章までを概観し、続いて第2節では「創造的身体表現遊び」における発達支援のあり方について、次のようにまとめた。

「創造的身体表現遊び」の環境は、発達障がい児の「動きたい」「かかわりたい」という欲求を促す。彼らは、環境（他者や遊具）との対話の中で主体的に動き、身体運動能力、コミュニケーション能力、自尊感情を高めていると考えられる。さらに、「創造的身体表現遊び」においては、人間の身体運動、コミュニケーション、自尊感情における発達の「広がり」と発達段階の「流れ（連続性）」を包括的にとらえた様々な要素を含む遊びの場を繰り返し体験できる。すなわち、「創造的身体表現遊び」は、標準的な発達から想定される課題を特化しマイナスを埋めようとする対処療法的な訓練法ではなく、発達障がい児の主体的な育ちを支える漸次的で循環的な展開を有している。

最後に第3節では、本研究の限界と今後の課題についてまとめた。